

特276

623

南

京



メソッド・オブ・ザ・マスタース・オブ・...



始



南京

南京は千七百餘年前吳の孫建が建都して以來九朝の國都となり四十五帝の王城の地であつた。然し乍ら中國の首都として支那全土に號令せしは概ね短期に終り大半は割據時代の王城となり其の間屢々中斷して治亂興亡の歴史を繰返した。而して南京の建都年間は前後を通算して約四百年である。

都名も朝代の變遷に従ひ改稱され十八回の變遷を経た。そのうち金陵、秣陵、建業、建康、江寧などは今なほ南京の別名となつてゐる。南京の名稱は明の成祖が北京に遷都後南北南京をたて、この地を南京と稱したのに始まる。

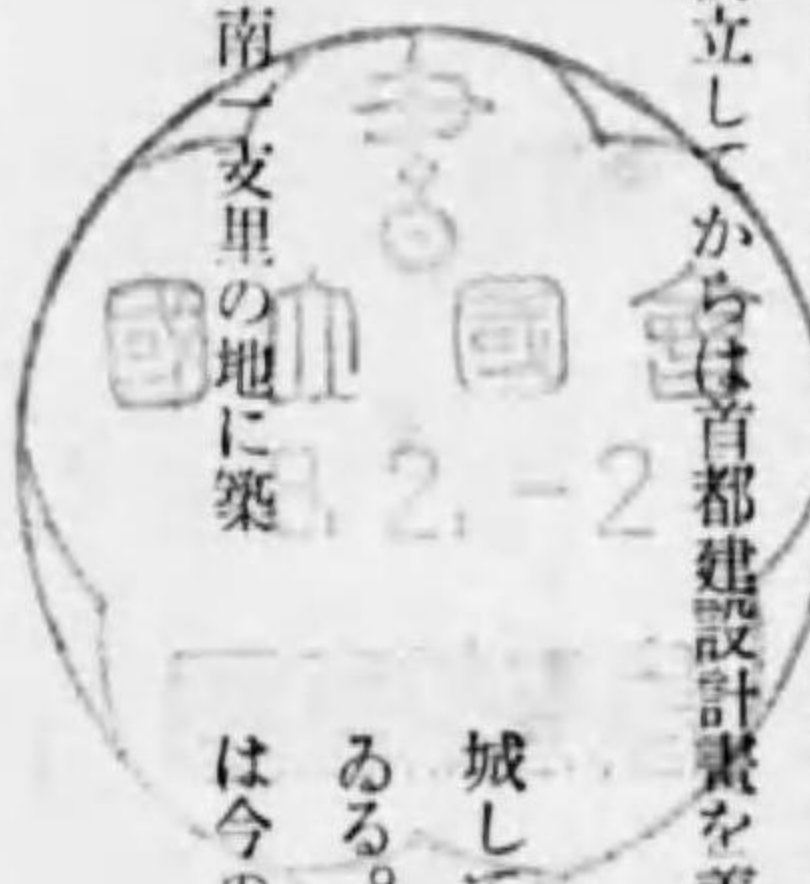
南京は又用兵上必争の地となり既に周秦の候より軍事上の重要地點となり、三國時代の諸葛孔明が「鍾山(紫金山)は龍蟠し、石城は虎踞す、眞に帝王の宮」と曰ひし如く紫金山を始め、小丘の起伏と揚子江の流を衝として險要の守城であつた。

南京はかゝる重要地點にあるが爲に屢々兵變に遭ひ殊に六朝末期の頽勢に乗じ、隋の文帝が北支より揚子江を渡り南京に攻め入つたときと、清朝末期長髮賊がこの地に據つて太平天國を建てたときの二回に亘り徹底的な破壊を受け、絢爛たる六朝文化と大規模な明代初期の文化遺跡の大半を灰燼に歸してしまつた。

革命の父孫文が漢民族の父祖の地として、民國元年元旦この地に於て中華民國臨時大總統に就任して以來十六年、蔣介石の率ゐる國民革命軍が北伐完成後國民政府を南京に樹立してからは首都建設計畫を着々として實現し、舊都南京も近代都市としての新装を備へるに至つたのである。

歴史

春秋の末期越の宰相范蠡は吳を敗り淮水の南支里の地に築



城して金陵と稱した。今の廢越城にして俗に越臺とも呼ばれてゐる。戰國時代には楚越を敗り金陵邑を置いたが楚の金陵邑城は今の石頭城を謂ふ。吳の黃龍元年(皇紀八八九年)孫權は淮水

の北五支里の地に建業城を築き即位して吳大帝となつた。南京の建都はこの時に初まる。佛寺を建立、運河を開鑿し都城の規模や、備はつた。晉は建業を陥し(皇紀九四〇年)秣陵縣と改め國

都は洛陽に遷り、數度の強震あり、旱魃、飢饉が續いてこの地方は荒廢に任されたが皇紀九七七年再び國都となり建康と稱せられ清涼山、雨花臺、北極閣及び五臺山方面に聚落した。その後、福

建方面から蜂起した海賊群は揚子江より秦淮河を侵すに至り大傑劉裕(のちの宋高祖)出てこれを治め遂に宋朝をこの地に建てた(皇紀一〇八〇年)。次に齊の建都二十三年を経て梁の武帝の

時代となつた。南京史上に特筆すべき梁武帝は德政を施し學を興し佛教を信じて多くの寺を建立した。その頃東魏の武將であつた候惠は武帝を鷄籠山の一寺に幽閉し、八十歳の帝は其處で

薨じた。陳霸先は候惠を誅し梁を篡つて即位し陳朝を建てたが五代叔寶に至り、隋の文帝のため脆くも建康城は落ちて陳朝は

亡び南北朝は統一されて隋の天下となり、國都は長安に遷された。三國時代の吳及び晉から南朝の宋、齊、梁、陳に至る三百五十年間を六朝と謂ひ、絢爛たる六朝文化はこの地に現出したのである。當時の都城は城周凡そ二十支里、城門十二を有し城

内に皇城を造營した。其の一部は鷄籠山北角に現存する臺城であつて周圍六支里八門を開いた。西華門(故宮飛行場西北隅)は當時の大司馬門の在つた處と謂ふ。

隋が江南を平定するや城邑宮闕は耕墾され田野と化し、南唐の世に都城となりしを除いては南京の重要性は失はれてしまつた。

皇紀一九八七年、安徽に生れた朱元璋は元末諸方に起つた漢族の群雄のうち漸次威望を集めつゝ元室の内訌に乗じて將軍徐達等を遣して北京を陥し、南京に即位して應天府と稱した。即ち

明太祖洪武帝であつて都城建設に着手し世界に誇る南京城を築いた。太祖の死後惠帝のときその叔父燕王は幼帝を退け帝位に即き成祖(永樂帝)と號し都を北京に遷し舊都を南京と稱した。

皇紀二三〇四年明朝北京を追はれるや諸侯競つてこの地に王朝を再建せんとしたが滿洲族に敗れ清朝の駐防城となり滿洲官兵の駐屯するところとなつた。康熙、乾隆帝南巡の途、再々南京

にも寄られ、孝陵に參墓し玄武湖に水軍の演習を觀戦し悠々自適の時を過したと謂はれる。清道光二十二年(皇紀二五〇二年)八月五日南京の住民は突如下關沖に現れた英艦八十餘隻によつ

て驚かされた。同月二十五日コーンウォリス號上に於て結ばれた南京條約は即ち阿片戦争の調印であつた。降つて咸豐三年(皇紀二五一年)洪秀全の率ゐる太平天國軍(長髮賊)は南京城に迫り、二萬の滿洲軍は殲滅され、南京は落城するに及び太平軍の國都大京となり十三年間占據するところとなつた。この間南京の荒廢は著しく歴史的建造物は破壊され、而も何等の建設的事業はなされなかつた。時に清朝の義勇軍を起した曾國蕃は遂に天京を陥し、洪秀全は自殺して長髮賊の亂は治つた。その後、清朝末期の四十餘年間に下關港は開港され、滬寧鐵路の開通、江寧鐵路の敷設等により再び南京の重要性は加はり、宣統三年革命の烽火揚るや遂に孫逸仙は民國元年、中華民國第一次大總統としてこゝに假政府を建てたがそれも東の間、袁世凱によつて國都はまた北京に遷された。民國十五年、廣東に擧兵した國民革命軍は十六年三月、遂に江南を衝いて南京を陥れ、各國在留民に對し暴虐の限りを盡し、在泊の英、米砲艦をして火蓋を切るに至らしめ墮斃すべき南京事件を惹起した。翌年夏以來國民政府は事實上の中華民國政府となり南京は首都として銳意諸般の施設を急ぎ近代都市化されつゝあつたのである。

城壁と城門

世界の雄城として南京の誇る城壁は明の洪武年間、七年の歳月を費して築城したもので、周圍凡そ三十四軒、北京城の約二倍に及ぶ廣茅を有し、高さ十五乃至三十米、幅十二米の尨大なる煉瓦壁からなり、これに門十七を開いて城外と交通せしめ、特に中山門、中華門、水西門並に挹江門は主要關門をなしてゐる。

歴史的南京攻略戦に於けるわが脇坂部隊の光華門(俗に洪武門)一番乗は實に昭和十二年十二月十日午後五時であつた。十二日午後零時迄には中華門突入城内に第一歩を印し、十三日午前三時中山門も破れ、遂に國民政府樓上には日章旗が懸り、南京城は完全に皇軍の占領するところとなつたのである。

風 土

南京は江蘇省の西部、揚子江の屈曲點の南岸にあり、下關から江面約一軒の揚子江を隔て浦口に對してゐる。市區の面積約千八百方軒、城壁の内外に分れ城内の東南部は殆ど平坦で秦淮

河曲流し、西北部は丘岡連り山の手地帯を形成してゐる。城外には東部城壁に近接して標高四百二十米の紫金山あり、これを最高として東、北、南部に小山が起伏し、城壁東隣の玄武湖、西隣の莫愁湖は何れも水は浅いが風致を添へてゐる。揚子江は

・紫金山上の天文臺



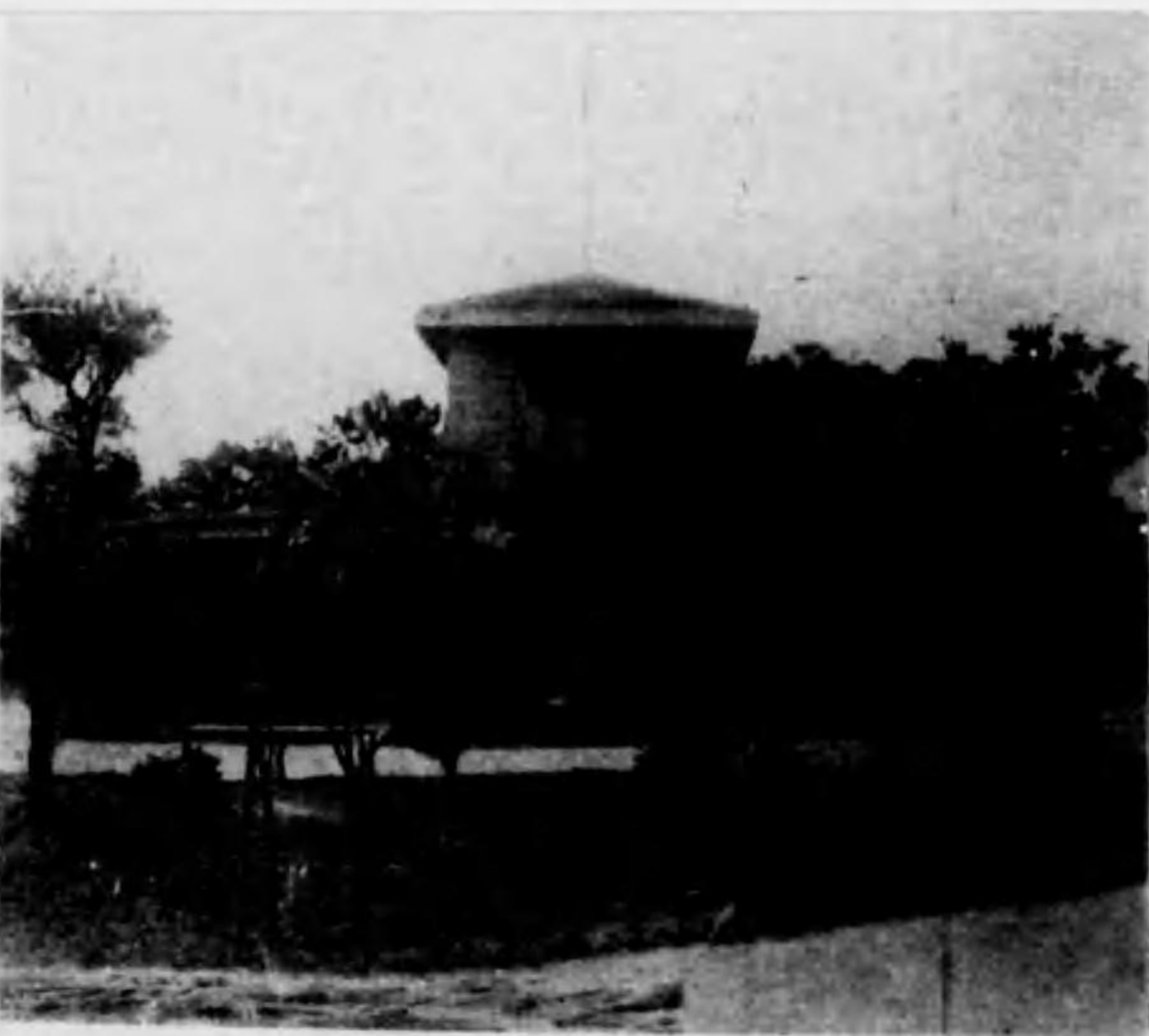
この邊は江幅狭まり水深五十呎から百六十呎あり、夏季は増水して潮力弱く流下速度二、三ノットを呈する。江邊は概して低地なる爲夏季往來浸水することがある。

南京は北緯三十二度五、日本の九州南部と大

差がない。季節風の影響を受け冬季は攝氏零度を上下し、盛夏は時に攝氏四十度以上に昇ることがある。雨量は十二月が最少で六、七月を最高とし、雨期は晴雨の比十六日對十四日平均に達する。

交 通

陸路 鐵道は東に京滬鐵路(三百一十軒)あり、上海、南京間を運轉し事變前毎日七往復あり、首都特急は所要時間五時間に上海に達した。對岸浦口から北上する津浦鐵路(一千九軒)は毎日列車三往復を運轉してゐた。其の中一往復は上海を發し揚子江を渡航して北京に直通、浦口、天津間約一晝夜を要した。更に西には中華門より孫家埠に至る江南鐵路あり蕪湖迄四往復三時間を要した。事變に當り鐵路は抗日軍の生命線であつたが我進撃を恐れて破壊爆破を行ひ運轉機材も大半を失つてゐた。我軍の手に歸してからも屢々遊撃隊の妨害目標となり、幾度か我鐵道隊の死闘を経て今日之等全線の復舊も略々完成し、一般交通運輸取扱開始の運びをみるに至り、鐵路による治安確保、沿線の復舊も顯著なる進展を來してゐる。



・南京第一公園

尙南京より句容、溧陽、宣興を経て東南杭州に至る公路には毎日一往復の省營バスあり、一時間にて杭州に達してゐたが事變後休止されてゐる。

水路 洋々たる揚子江の水運は戦前わが日清汽船をはじめ中

成都間)、滬漢線(上海、漢口間)及び獨支合辦の歐亞航空の滬平線(上海、北京間)、滬包線(上海、包頭間)、滬昆線(上海、昆明間)の寄航地となり、故宮飛行場を使用して國際飛行場と稱してゐた。

昭和十三年十月五日よりわが日本航空會社に於て新にダグラス機により南京、東京間の日中連絡飛行を開始してゐる。

市内交通 國府總都以來首都建設委員會は先づ首都幹路系統を規定し民國二十三年末に於て中山、中正、太平、朱雀、白下、漢中、中華、雨花、山西、國府、玄武、熱河、大光等四十八路線延長十一萬九千米を完成した。

その最大幹線をなす中山路は城外下關碼頭から城内中央ロウタリ新街口を経て中山門に至る十二軒、幅五十米を有し車馬、人道、植樹地帯を配した代表的路線である。

主要交通機關としては下關から中華門に至る京市鐵路あり、事變前には毎日數回列車を運轉してゐた。また城外下關驛、和平門驛から城内重要幹線を経て中華門に至る江南公共汽車公司のバス路線が數系統あり、約五分毎に運行するほか、中山陵方面の遊覽バスも週遊運轉されてゐた。現在に於ては華中都市自

國系招商局、三北公司、寧紹公司、英國系怡和公司、太古公司の所屬各船が定期運航してゐたが、現在は日清汽船の手で上海漢口間の運航を開始してゐる。

空路 事變前に於ては米支合辦の中國航空の滬蓉線(上海、

動車會社に於て下關驛、新街口及び中心區循環路線に十分毎にバスの運轉を開始し、市民の便に供せられてゐる(料金一區五錢、下關、新街口間二十錢)。尙戰跡見學バスの運轉も近く實施の運びに至るであらう。

其他補助交通機關として現在營業用自動車約五十臺あり、主として邦人經營にして國產ダットサンも登場し、一時の交通難も稍々緩和せられるに至つた(料金大型一時間五圓、小型二圓五十錢)。人力車は現在約五千七百臺あり、市民の足として重要な役割をなしてゐる(料金最初一軒十錢、あと一軒毎に五錢増見當、一日貸切二圓)。

人口

當地は民國元年末に於て約二十七萬人に過ぎなかつたのが十六年に至り三十六萬餘となり、事變前に於ては百萬を突破するの激増振りを示した。然し乍ら日支事變の擴大するや避難者の群は上海、香港へ、更に切迫するや漢口方面或は近郷に遁れ皇軍入城當時は二十五萬に足りない難民が所謂難民區一帶に居住してゐた。昭和十三年元旦、自治委員會の發會を端緒として宣

撫工作は着々として實行され、同十四年一月末に於ては約六十萬人を數ふるに至つた。在留邦人は事變前に於ては排日抗日運動に妨げられ、僅に五十一戸、百五十四人に過ぎなかつたが、皇軍の入城と共に邦人の進出は各機關の統制のもとに健全なる發展の一路を辿り

同十四年一月末に於て七百四十戸、四千二百二十六名に達してゐる。尙外國人在留者は昭和十二年一月に於て僅に六百八十七名にして大半は外交團員若くは政治、教育、宗教關係者であつた。外國人の復歸者昭和十三年末に於て約九十

・秦淮河と畫舫



名である。

通貨、爲替、金融、物價

現在流通してゐる貨幣は邦貨としては日本銀行券又は軍票である。支那貨は中央、中國、交通、農民銀行券(上海)等で、主として支那人間に流通してゐる。朝鮮銀行券、中國聯合準備銀行券、滿洲國幣等は流通してゐないから旅行者は注意を要する。爲替 金融機關としては漢口銀行(邦人經營)、橫濱正金銀行の二行が開設され、一般業務を取扱つてゐる。物價は事變前に比し平均三割見當の騰貴を示してゐる。

遊覽コース

- 一 紫金山方面 自動車にて約四時間(一周約十八軒)
新街口廣場發—明故宮跡—光華門—中山門—明孝陵—中山陵—革命軍陣亡將士墓—譚墓—中央體育場—中山門—新街口着

- イ 城外方面の視察は成るべく邦人經營タクシーによる方がよい。
- ロ 中山陵内殿の參觀は警備司令部の許可證を有する者のみ許されてゐる。
- ハ 寫眞撮影取締規定に随ひ撮影にあたり充分注意すること



鳴 鷄 寺

名勝戰跡視察上の注意

- 大和旅館
- 城外下關 揚子ホテル、野田屋旅館
- 右のうち外人宿泊に適するものは亞細亞ホテル、南京ホテル、揚子ホテル等

名勝舊蹟

旅行斡旋機關

ジャパン・ツーリスト・ビュロー(日本國際觀光局)南京案内所で一般旅客の斡旋を行つてゐる。

〔所在地〕 南京市中山路一號(新街口) 電話二一五〇四番

旅 館

邦人經營旅館 普通宿泊料一泊五圓—十圓

城内 亞細亞ホテル(室料四圓—二十五圓)、南京ホテル、寶來館、國華ホテル、福田館、富貴館、興亞館、日進館、

二 玄武湖方面 自動車にて約三時間(一周約十二軒)

新街口發—鷄鳴寺—北極閣—姊妹鐘—玄武門—玄武湖(五洲公園ドライブ又は舟遊)—鼓樓—清涼山—烏龍潭—新街口着

三 秦淮河方面 自動車にて約三時間(一周約十八軒)

新街口發—夫子廟—貢院—秦淮河—中華門—雨花臺—水西門—莫愁湖—水西門—新街口着

南京の土産品 綬品、摺紙扇、雨花石、板鴨、印材刻印其他骨董品類。

娛樂機關 映畫館は東和劇場、中喜劇場、首都大戲院等、支那劇は大世界、世界戲院等。

支那料理 六華春、太平洋、大三元(何れも夫子廟貢院街に在り)

日本料理 福宮、妻鶴、金龍、ことぶき、たちばな、大賀莊等

城 内

明の故宮 中山門内の南側に城門らしいものがある。この一帯は六百年前、明の太祖が築いた紫禁城の跡で即ち光華門に對する午朝門と中山門に對する東長安門の遺跡であつて、當時は周圍六里の皇城があつたが、北京奠都に次いで長髮賊の亂で全く灰燼に歸してしまつた。

半山寺 故宮の東北に王安石の居室であつたといふ半山寺がある。庭前の雙楹は安石の手植したものと謂ひ、半山の名は安石が自ら半山と號してゐたによる、宋の元豐七年病を得、居宅を以て寺としたとのことである。蘇東坡が屢々遊んで詩を賦し

たところである。

鷄籠山 高さ九十米、その形が鷄籠の如く、宋の文帝時代に
廬山の處士を招いてこの山に館を開き學徒を集めて教授せしめ
たと傳へらる。山頂に北極閣、鷄鳴寺、山麓に臺城等がある。

鷄鳴寺 古は同泰寺と呼ばれ、梁の武帝が早曉に那那城へ行
幸した時、こゝに至つて始めて鷄鳴を聞き、因つて鷄鳴寺と改
めたと傳へられてゐる。六朝建康宮の故址であつて、また杜樊
川の詩に謂ふ南朝四百八十寺の一である。現在の寺觀は明代の
建立であつて、山門に勅建古鷄鳴寺の額がある。石段をあがり
玄武湖に面し豁蒙樓、景陽樓がある。豁蒙樓は明の馮虛閣の舊
址で、張文襄の題額が懸つてゐる。文襄が兩江總督であつた時
建設したものであるといふ。

臺城 鷄鳴寺の東麓の景陽井から石段を登れば東側の城壁は
明代のものであるが、西側鷄鳴寺の裏手まで二百米餘りで切れ
てゐるものは晋代の建業城の壞れず残つた一部であつて、臺城
と謂はれてゐる。當時の築城は鷄鳴寺と北極閣の山を中心とし
て前を湖として周圍五軒餘に造營したもので、六朝時代に南京
を攻める兵は、南から來るものは石頭城を取り、東から來るも



・中山 關

のは此處である。尙北清事變の際、獨逸に持つて行かれた北京
天文臺の觀象機は清の初年、此處にあつたのを北京に移したも
のである。

鼓樓 中山北路を一直線に南行して中央路に岐れる邊、西方

の小高い所に鼓
樓がある。一名
鐘鼓樓と稱し高
さ十餘丈、煉瓦
建の樓門が路街
を跨つて立つて
ゐる。明の洪武
十五年の建造で
あつて、樓上には
清の聖祖の戒
碑を安置し、ま
た關壯繆を祀つ
てある。

獅々山 下關

のはこの臺城を
占領すれば南京
の全城を攻略し
得たと言はれて
ゐる。

北極閣 鷄鳴

寺と鼓樓の間に
聳立つ山嶺を北
極閣と謂ひ、元
の至正年間に創
立した觀星臺の
遺蹟である。後
に欽天臺と稱し
清の太祖がこの
地に臨幸して建立した曠觀臺といふ三層樓の高塔は數年前まで
あつたが、その後壞されて無線電信臺となつてゐる。陳の後王
が隋に滅される前に臨春、結綺、望山の三樓閣を造つて長夜の
宴を催した跡で、革命戦に張勳が踏止つて清朝に忠節を盡した



・明 孝 陵

の興中門を入ると直ぐ東にある小山、晋の元帝はこれを廬龍山
と呼んだが明初に至り現在の名に改む。山上に砲臺があり、古
から南京城北の要地として知られ、明の太祖が陳友諒を撃破し
た時この山に登つて督戦したと傳へらる。山麓には靜海寺の磊
磊たる奇岩がある。寺内の三宿巖については宋の相奩處允文が
全軍を采石磯に破り、歸途この巖に三宿したと謂はる。
烏龍潭 漢西門の北部城内に烏龍潭といふ小池がある。前唐
の碩學顏真卿の放生池であつて、池中の放生塔には尙公の神位
を祀つてある。

潭の東、人家の角に「孔明駐馬之處」と書いた石碑があり、諸
葛孔明が馬を駐めて附近の形勢を觀望した處、孔明の觀測の結
果に依り孫權は鎮江から都を南京に移したと謂はれてゐる。

清涼山 漢西門から一軒半にして清涼山に至る。小山の上に
寺院がある。初め清涼廣慧寺と呼ばれてゐた禪宗の大道場で、
院内の德慶堂は唐後王の避暑宮であつた。

堂内の大額は後王の親筆である。このあたりからは莫愁湖、
雨花臺、紫金山、北極閣及び長江の流れを指呼の間に收めるこ
とが出来、頗る壯觀である。

史に傳ふるところによれば清涼山では梁代に達摩が南天竺から來て面壁九年の修業をしたといふ。唐代には空海上人以下多數の日本僧侶が來て此處の道場で參禪してゐた。

石頭城跡 清涼山の北一軒半にあり、所謂吳の秣陵城で、孫權が築城した石頭城であつた。

朝天宮 莫愁路を南に行き水西門内に治城山といふ高臺がある。これは吳王夫差がその佩劍を鑄造した治城の跡で、宋代は天慶觀、元代は元妙觀と謂つて道教の道場であつたが明時代に宮中へ參賀する禮式を百官に教へた處として朝天宮と改め長髮賊の亂で大半烏有に歸したものを李鴻章が改修して本殿に孔子以下の聖賢を祀つた。併し革命軍の入城で長らく兵舎に使用し荒されてしまつた。

秦淮河 城の外側には灌水を引き城の南面と西面を環流せしめて濠としてゐる。この濠は秦の始皇帝がこの地に巡幸した際、金陵に王氣があるとの易斷に依り、王氣を散すべく掘つたのだと謂はれ、隋、唐以來河畔は風流狹斜の巷として妓院は皆此處に蟠集し、河上には畫舫櫓比し歌聲一夜を徹する歡樂境を現出したが、前南京市政府に於て禁娼後は昔日の華かさは無い。

中山陵 孝陵の東側、紫金山の中腹に白い石造の大建築物がある。これが孫文の中山陵である。孫文は民國十四年三月十二日北京の旅舎で逝つたが、民國十八年六月一日中國國民黨の名に於て遺骸を北京から帝王の禮を以て迎へた。石材は蘇州、福建、香港から取寄せ五百萬元といふ莫大な工費を費したもので、日本でこれ程の工事をすれば二千萬圓近くの大金がかかるであらうとわが専門家が見てゐる。奥殿階上の巨大な石置の表には三民主義を現し、正面に孫文總理の石像が据ゑてあり、四方の石壁には孫文の書いた建國の大綱、胡漢民の書いた孫文の遺囑、蔣介石の書いた軍官學校校訓、故譚延闓の書いた講演の一節等が刻んである。堂の後は閉扉を以て墓室に通じてゐる。

靈谷寺 中山陵から東約一軒にあり、梁の天監十三年開善精舎として開基、宋代に太平興國寺と改め、明に至つて靈谷寺と稱した。明代には三巨刹の一と謂はれ、清の康熙四十六年聖祖南巡の時に御書の額を賜つて居り、金陵第一の大伽藍であつたが長髮賊の爲め焼かれ、衰頽に委ねられてゐる。

國民革命軍陣亡將士公墓 靈谷寺無量殿後方の五方殿の舊址に祭堂を建て誌公塔、記念堂あり。其の後方數百歩の地に九層

釣魚巷 秦淮河は利涉橋から折れて北に向つてゐる。橋より北、河の西畔は秦淮斜巷の中心地として有名な釣魚巷であつて河岸には無數の畫舫が點在し、岸上には妓院酒樓が並んでゐた。

城外

明孝陵 中山門から城外に出ると東北に當つて紫金山(本名は鐘山)が屹立してゐる。この山麓に明の孝陵がある。明の太祖洪武帝と妃馬皇后、懿文太子を合葬したものであつて、中山陵に較れる邊から石獸、石門、石人が一定の間隔を以て配置されてゐる。石獸は六種あり、獅子、獬、駱駝、象、麒麟及び馬が各二對、一は坐し一は立つて並んでゐる。石人は八基あり四將軍、四文臣が相對してゐる。正殿は毀れ僅に清の聖祖の御筆「治隆唐宋」の四字を刻した石碑を存するのみ。庭内にある日本から送つた櫻樹の間を行くと隧道に當る。隧道上には明樓があつた。樓の後は寶城であつて松柏茂り其の地下は即ち明太祖埋骨の處である。孝陵内には曾て神鹿數千頭を飼つてゐたが今は殆どゐない。

の記念塔が建つてゐる。

譚院長墓 故行政院長譚延闓の國葬墓であつて靈谷寺の傍にある。中山陵の陽剛の美に對し、陰柔の美を備ふと稱せられてゐる。

中央體育場 民國二十年全國運動大會に備ふるため記念塔南部の地に設けられ、トラック、フィールド、プール、野球場、籠球場、排球場、ゴルフ場、庭球場等に分れ觀衆六萬人を收容し得る美事なものである。

玄武湖 紫金山の西、城壁に近く玄武湖は擴がつてゐる。一名後湖ともいひ、また眞武湖、蔣陵湖、習武湖等とも呼んでゐる。周圍約二十七軒、古は長江の水が湖水と流通してゐて、明の太祖以來歷朝の水軍演習はこの湖の中で行はれたといふ。晋の元帝は紫金山の麓から覆舟山に至る長堤を築いて今の中湖と分ち、北湖と稱した。宋の元嘉年間、湖上に黒龍が現れたと謂ふので始めて玄武湖と名づけ、明帝は習武湖と改め、また清朝以來玄を元とも書いてゐる。湖中に五つの島があり、五洲公園と名づけられ、舟遊に好適、殊に夏季蓮花の咲く頃の眺は良い。

莫愁湖 水西門を出ると艶史に名高い莫愁湖がある。昔は迎

擔湖と呼んでゐたが齊代に美妓盧莫愁が此處に住んでゐたとて莫愁湖と稱するに至つたと傳へらる。

史傳に明太祖が丞相の中山王徐達と此處で碁を競ひ、勝つたからこの湖を興へると約束し、遂に徐達が勝つて湖を賜つたと謂はれる。樓内には中山王と莫愁の像がある。

報恩寺 城南中華門外の古長千里にある。吳の大帝の創建、阿育王塔を置かれ、江南に於ける塔寺の始めであるといふ。

雨花臺の武帝これを重修し、宋では天禧寺と改め、元では慈恩旌寺號となし、九級八面、百餘丈の大塔を建立したが、その後長髮賊の亂に悉く焼失して今は廢墟、僅に残る瓦によつて往時を偲ぶに過ぎない。

雨花臺 南京で一番賑かな南門大街の中華門(南門)を出て暫く行くと小丘がある。この丘陵が雨花臺であつて、梁の武帝の時、名僧雲光法師が此處に坐つて法を説くと天が感動して花を雨のやうに降らしたとの故事に因んでこの名が出たと傳へらる。曾て長髮賊の太平天國軍と曾國藩の率ゐる清朝義勇軍との

激戦地であつたが、今次事變に際しては皇軍南京攻略戦の新戦場となつた。

雨花臺の麓の容室亭前に一碑があり、宋の忠臣楊公刻心處と刻んである。これ即ち吉水の人楊忠襄公が金人に殺された遺址である。

雨花臺の東麓に明の忠文人たる方孝儒と忠武人たる鄧愈及び宋の王安石の墓がある。

近 郊

宋帝陵 中山陵の東八軒餘、南京本城に對して外城の麒麟門の外に宋の武帝と文帝の二つの陵の跡があるが、陵墓は畑となり路傍に長壽陵、初寧陵と書いた二つの墓石があるのみ、その石面の彫刻は南京附近最古のものとして考古學の好資料である。

湯山溫泉 麒麟門から二十八軒餘、南京から杭州に通ずる大道を行けば湯水鎮に近づき山麓に湯山溫泉がある。泉量はあまり多くはないが無色透明、無臭にして硫黄とラヂウムを含み、

木子廟

附近唯一の温泉として知られてゐる。

棲霞山 下關驛より上海方面へ向ひ、棲霞山驛で下車し約一軒行けば攝山の西麓に六朝の古寺がある。名僧棲霞隱士の修道の地であつた爲め棲霞禪寺と言はれ、院内に隋の文帝の舍利を藏すと傳へられる五層樓、高さ十五米の大理石の舍利塔があり隋時代の優秀な藝術品として知られてゐる。寺の後には齊時代の作の千佛岩があるが、大部分は壞れ、その上にセメントを塗り彩色してあるので原形は見られない。尙ほ寺の前には唐の高宗の親筆になる碑文があり、何れも一千年前のもので、南京附近の遺物としては最古のものである。城外南郊の牛首山と共にハイキングに適し「春牛首秋棲霞」の稱あり、紅葉の名勝地としても知られてゐる。

燕子磯 下關から約二十五軒、長江岸に磯岩が突出で、その形が燕の飛ぶに似てゐる爲め燕子磯と言はれ、景勝の地である。磯の上から見ると前面に長江が蜿蜒として流れ、遠く江北の山嶺を望む大陸的な景色は壯觀である。その沿道の幕府山の山腹には數箇の古寺と十二洞窟がある。

昭和十四年三月二十日印刷
昭和十四年三月二十五日發行

定價 十錢

發行人 奉天市大和區住吉町五 西田 龜 萬 夫
編輯人 奉天市大和區住吉町五 藤 井 清
印刷人 奉天市大和區協和街四段 鍋 田 豊 治
印刷所 奉天市大和區協和街四段 滿日奉天印刷所

發行所 奉天市大和區住吉町五
ジャパン・ツーリスト・ビューロー

終

